特別
15
1413
45

門 15
號 1413
卷 45

帝國圖書館藏書

古事類苑 四十參

大化十年二月蘇我倉山田麻呂家獻白雉

白雉

もろこしに前製にもしるせよとこれをもとめ其前の号にもりこれを号とせり

黄雉のごとくにして形ち雀の如く色蒼白なり白雉と云ふ

二月庚午朔戊寅天皇白雉元年改元

孝徳天皇白雉元年改元

なることこれによる年號改元

これ純白のものなるが

なるものとす

迷信を文字中に云々

早稲田大學圖書館
昭和25.10.24
購入

俚諺と迷信

俚諺と迷信と其解

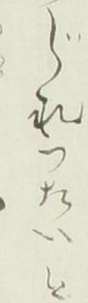
潮来
[illegible]のくろ[illegible]はよいかも
[illegible]ものがけョ袖づみ[illegible]してもこぶらてこれも苦界のくるさもし
[illegible]悪[illegible]ものきもんくの苦の世界
[illegible]。[illegible]のあもしやまるかとまつがおらせて[illegible]火のすてるさ、重の聲
[illegible]ぴょうやむ[illegible]ものんでできたに[illegible]腹がたかやセーヨやとそ[illegible]持なすこころもないこころ
ぞなど[illegible]を二度かせこころにものとさは[illegible]もそうしてこころ
等の世の[illegible]理論中[illegible]見[illegible]
[illegible]できかが空解[illegible]こはそ[illegible]

うたがねにまもちやあるらん下ひものとけめるようひさ抱だにせず
前の翻来[illegible]は[illegible]歌[illegible]もり[illegible]今婦女裙帯急脱者[illegible]蜘重系堡人衣巾但有喜事[illegible]
[illegible]て唐權德輿玉台體詩云非及裙帯解今朝嬉子
飛鉗華不可棄莫遅蓮十[illegible]衣面姪の歌[illegible]
蜘のふるまいかねて[illegible]
と今[illegible]人あるふ[illegible]歌の蜘蛛のふるまい猪人のまねと行す
[illegible]のと庄せられそ[illegible]堅[illegible]の蜘蛛重系堡人衣巾
の文と同じく和漢同一[illegible]のことをもしもり
[illegible]にも劇る嵐峰[illegible]施るのかげご篠子に写さと

憑妖術等の事

れが其苦痛を免れんとて
起れるにて同種類多し元来生
も生蛙を殺ぐるにて
又蛇蛙よく轉訛しするほか三
にて綿じ置てをあるこは三
ちカヒルの言に
の中にそは猫の
木の葉を包み山の神の社
とりて山に
せず
雷水を下さんとて
猫ども
其他狗犬の足も
かたつ
もちろ
もせ
この
の咒をあり
やるとて
雷水を下さんとて
猫ども
其他狗犬の足も
かたつ
もちろ
もせ
この
の咒をあり

と呼ぶ。紙片（情況）を記したものを多箇のそれぞれの
ひだに入れたもの。画によく
描かれる。



奈良のもの。鳥がかつこうの
火吹詞のごとくいうという
鳥さはつかめるが、からすが常とは異なり
きこゆるを聞て不逢とちぎりてゐるを
こゝろ、それにようこび鳥をとらへ
ゐてするごとし
逢坂のいはゆる
あるが、きくさに柳の黄緑をいふ
もち黒
さゝなり。こゝろがし

この頃のにやう奇のこゝろ
てんぐを持ちすゝるふ
ちんきくさが軽くそれるを
来らず心もだ〳〵じれったさの
差さするの日をおくし文
人の来ぬ
をなり

天正の末年書あり
事あり要、ぬ
をこゝ
はなり
是も乾として家の前へ出て
いかゞ祈て父の病の癒ん

多聞院日記
記す寺社の
抜書

永井禄翁の下町の話

銀座の町初めて煉瓦造りになりし時分人多く見せ物を造りて今の東京の花ござ一列にせりくにせりくにせりくと並べ松を植え紅葉を植え桜を植えそれも植えとうとうおしまいに銀座の町並木の松の初めは四方に枝ぶりのよい松ばかりを植えたのだそうな銀座通りの北側を植場と言ったのは銀座通りの北側を平の兵衛の屋敷の跡だからだそうな銀座通りの南側を植場と言ったのは永井禄翁の話

鋳銭場の話

寛永集成のいろ〳〵

同じ盛徳ながら三年に一通銭と数珠を前に松ばかりを植えたのだそうな銀座通りの北側を植場と言ったのは銀座通りの北側を平の兵衛の屋敷の跡だからだそうな銀座通りの南側を植場と言ったのは永井禄翁の話

鋳銭場の話

寛永集成のいろ〳〵

湯の儀は湯女の事

山の手廿八番
かんのん

山の手れ廿八番 札所 安養山 観音寺
せうけい八数ヶ格子日谷 永国山 一行院にあり 十七番

大和ノ内

大和ノ内と云ハ女ノ内ごとくなりとそ

飯塚の氏神社

飯塚の氏神社 此あたりの生土神 飯塚の
境内墓式の碑社とそ云 古墳

日黄不動

日黄不動 お井堀より当所に日黄
目向は人のそむかぬ所也 此不動尊は人をそ持ち元年
馬よりつとそ

[illegible]

[illegible]

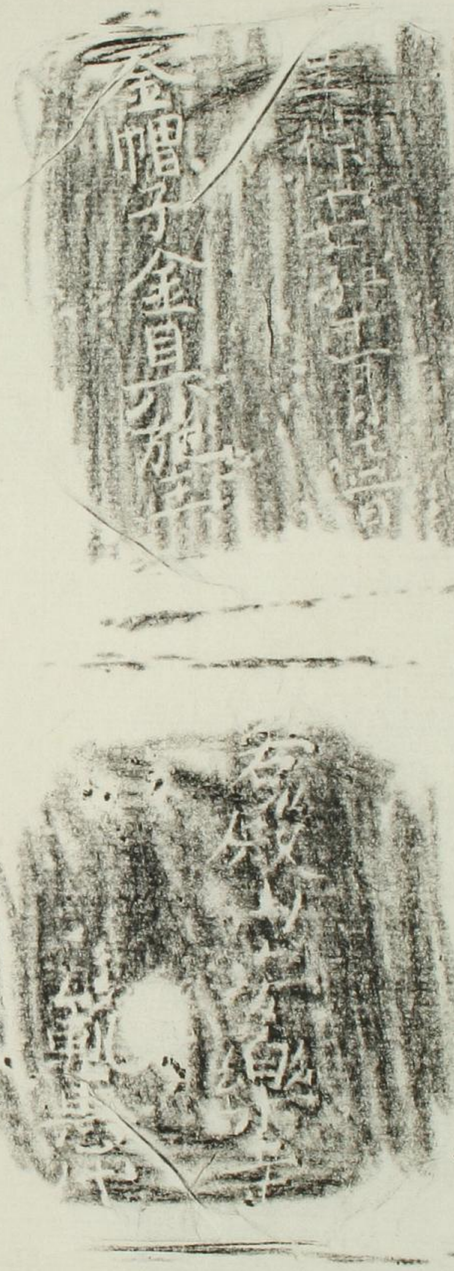
[illegible]

奉納百地蔵尊二世為安楽也

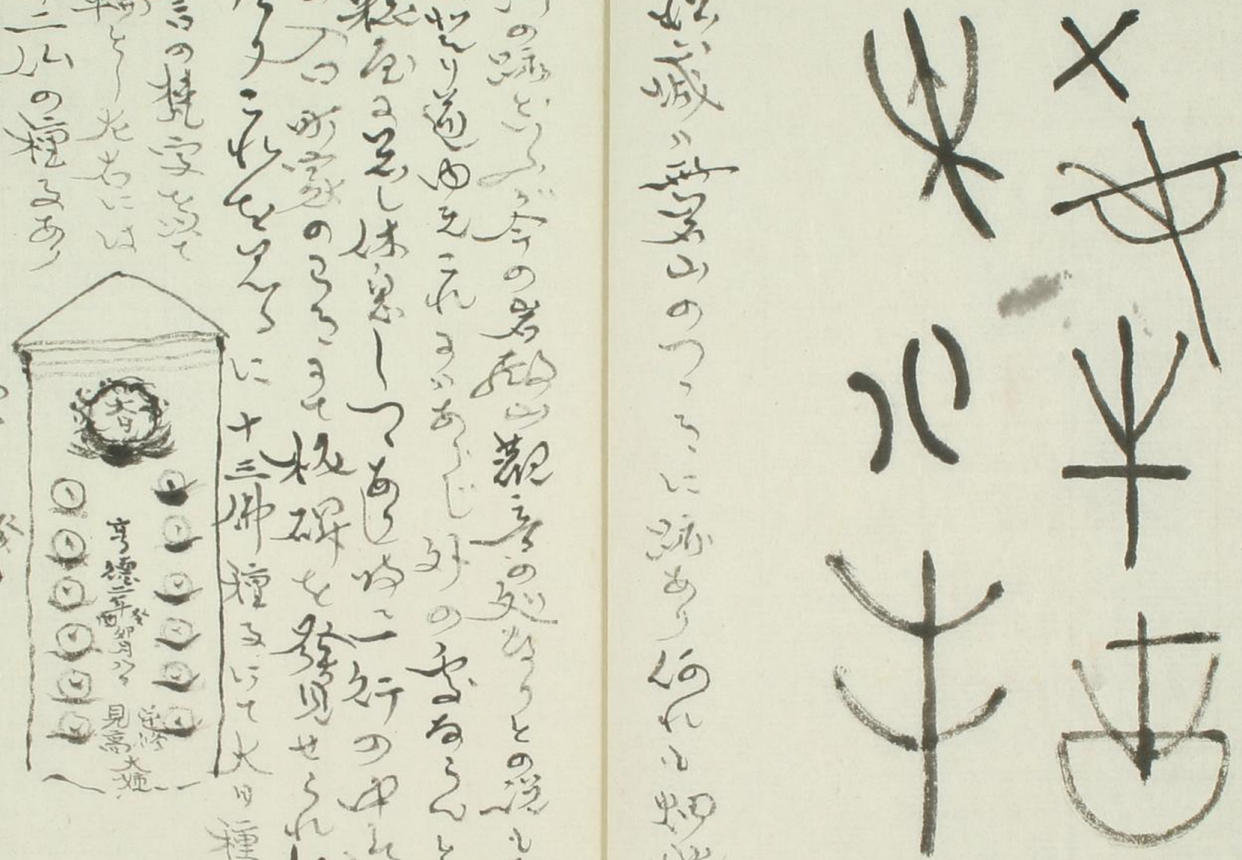
武カ

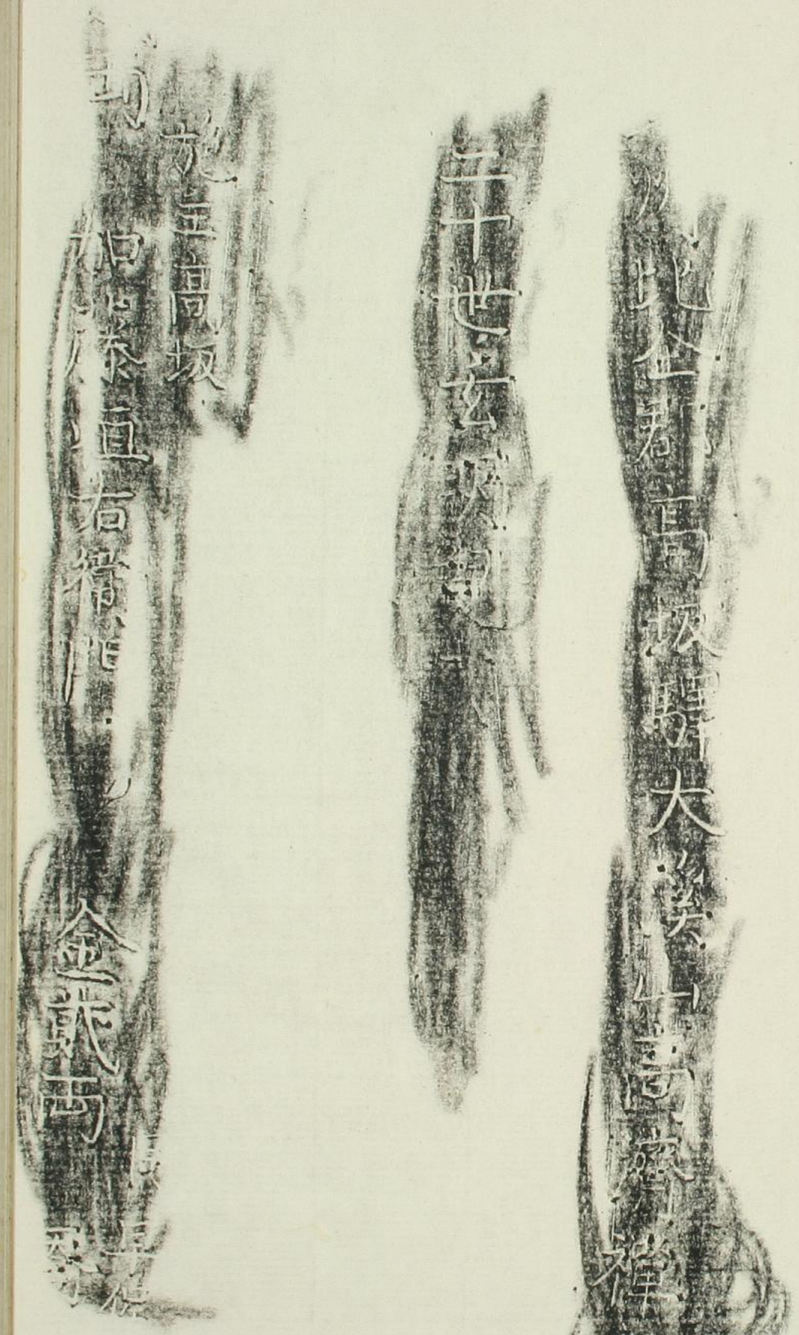
吉見 息障院

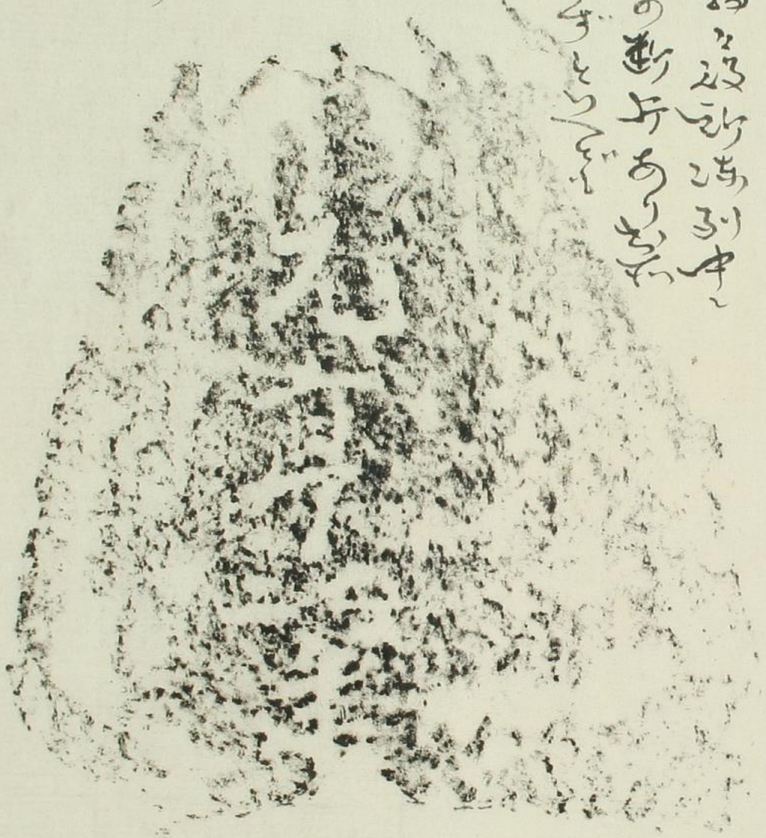
息障院

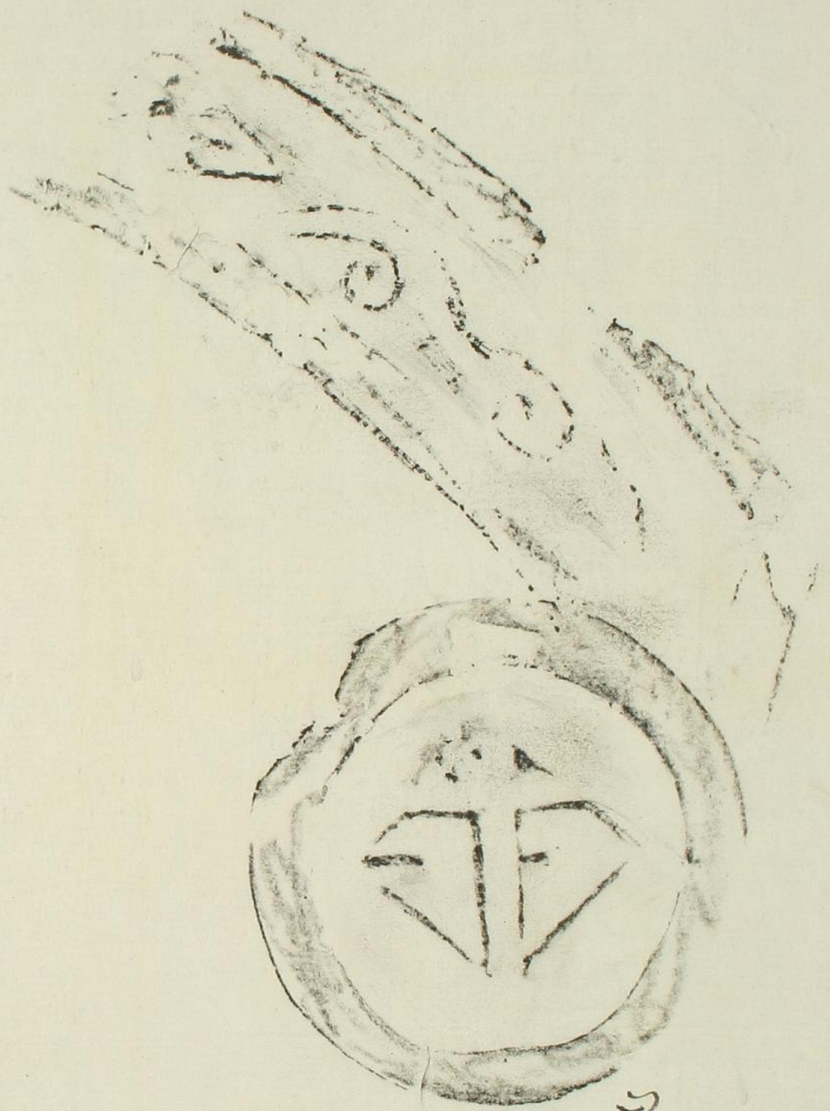


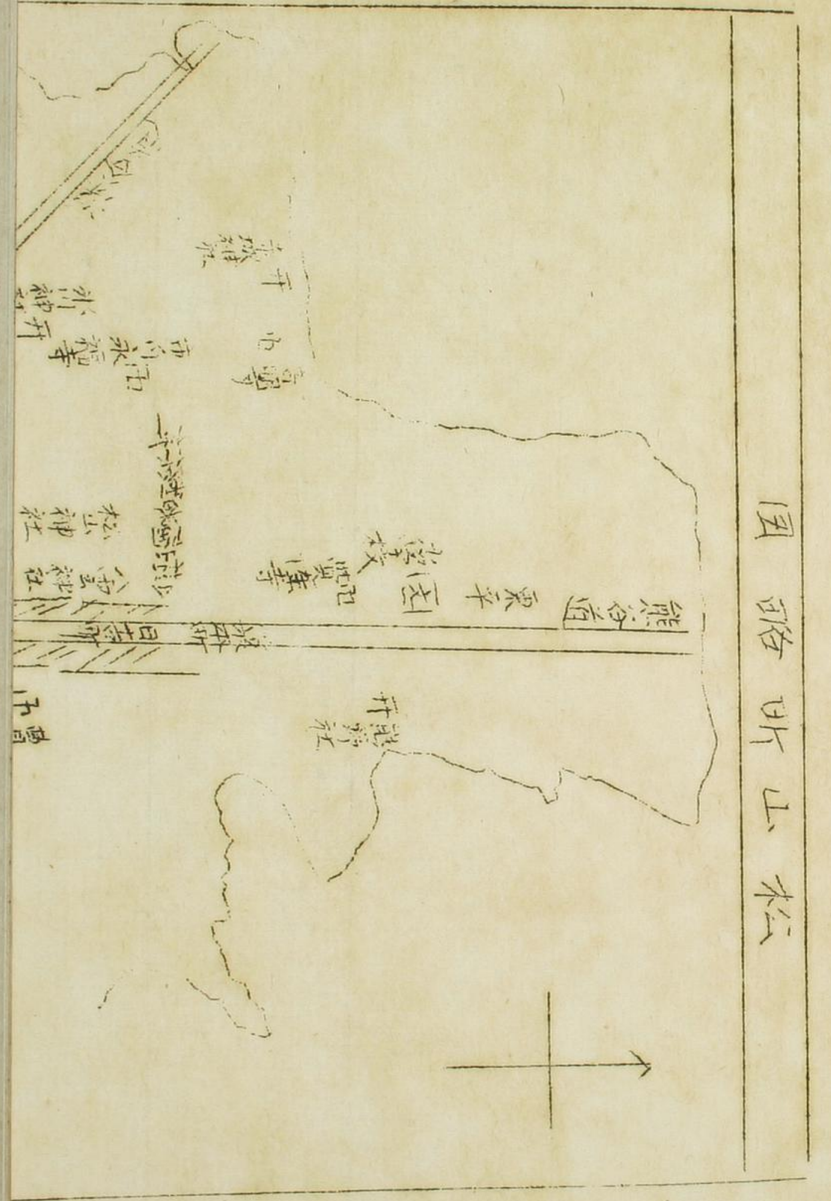
三ツ目べし猿の図











松山所習案内

一、戸数千四百九十八戸人口七千百二十七人

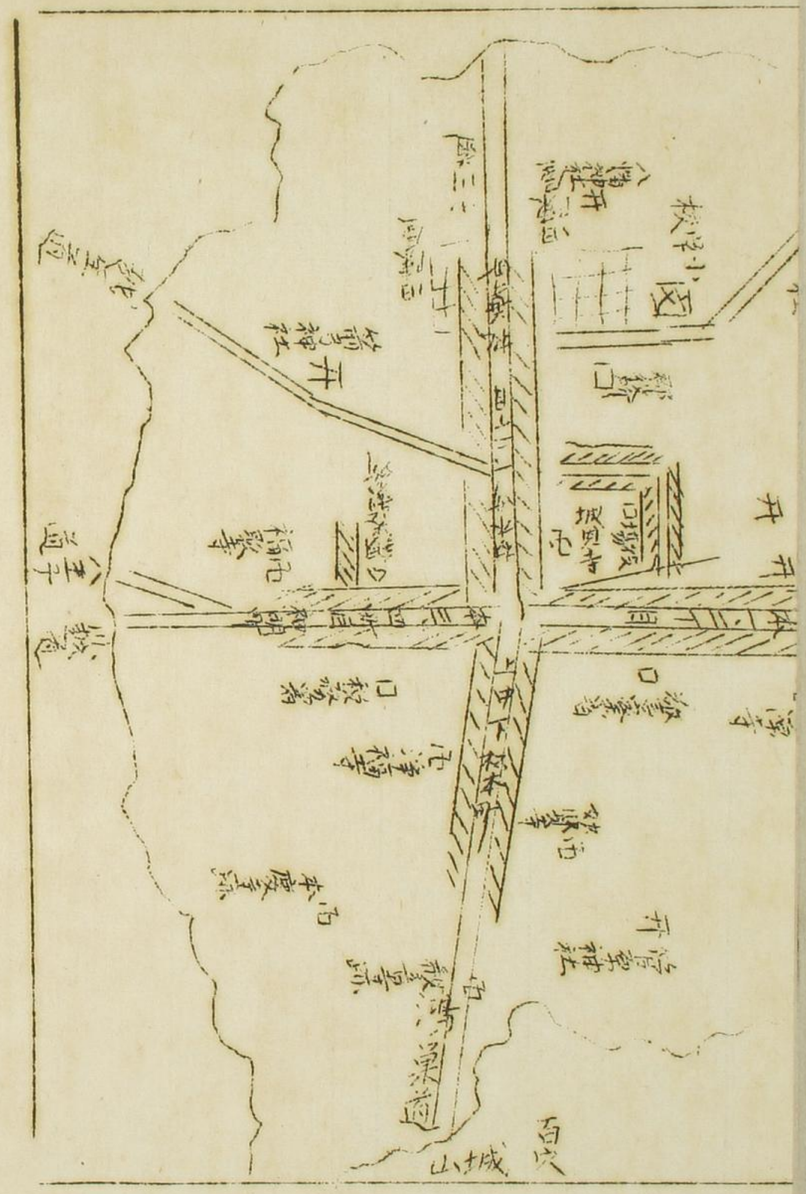
一、五、十ノ日市ヲ開ク取引ノ盛ナルモノハ米穀ナリ

一、松山城址　海抜五十丈米　応永中扇谷上杉氏ノ家老上田左衛門ノ築城スルトコロ幾変遷ヲ経慶長六年廃城トナル

一、百穴　昔時ヨリ数ケ横穴アリ百穴ト称ス明治二十年理学士坪井正五郎氏之ヲ発掘シ現今二百三十七穴アリ中ヨリ人骨曲玉管玉銅鏡、銀、金銀鉄環土器等ヲ獲テ古墳時代ノ横墓タルコトヲ確メ得タリ

一、笠前ノ神社　桑神　保食神　郷社

後一条天皇ノ御宇源頼信当社ニ祈願ヒノ平忠常ノ乱ヲ平ゲ社殿ヲ造営セシトヨリ年来変遷ヲ経テ松平大和守ノ領域トナルニ及ビ守ノ信仰ニテ現今本殿ハ文化八年　拝殿ハ天保六年造



板碑年号	所在	大正十年ヨリ年数
正嘉元年	岩殿正法寺	六六六
文永十年	仝	六四九
弘安四年	仝	六四一
仝八年	仝	六三四
仝徳治二年	仝	六一五
元亨二年	仝	六〇〇
建武五年	仝	五八四
康永二年	仝	五七九
観応三年	仝	五七〇
貞治六年	仝	五五五
康安四年	仝	五五一
永徳三年	仝	五三九
康応元年	仝	五三三
永九一年	仝	五〇八
仝	仝	四八七

在長元年 早俟、光明寺 六一一

梵鐘 岩殿正法寺 大工不祥 六〇〇

元亨二年 大工江戸田中供政守藤原吉正 二四二

延宝八年 正代世明寺寺主、江戸田中供政守藤原吉正 二四二

寛永十年 本宿常安寺 大工椎木金右衛門 二八

濫觴ニシテ頼信ノ奉納ナリト傳フル古鏡ト萬トアリ

一、永福寺（曹洞宗）
北条早雲ノ創立　現今ノ総門ハ其当時ノモノナリ
小田原北条家ヨリ送ヘタル皮天文廿二年ノ制札現存ス
当時ノ陳木数ヲ残ス

一、浄福寺（真宗）福聚寺（天台宗）両寺ニ行基ノ作トイヘル阿弥陀如来アリ

一、経塚　元亀二年　松山城主上田蔵人建テル
碑アリ　松山所神明町ニ移ス前橋ニ移封ノ際

一、旧陳屋　慶応三年　松平大和守川越ヨリ前橋ニ移封ノ際
藩士二百四十人ヲ引移住セシム　松山所ハ之ヨリ今日
ノ繁盛ヲ来セリ

永享七年						
文安二年	仝					
康正三年	仝					
徳治二年	高坂春山					
元亨二年	仝					
建武甑年	仝					
応四年	仝					
永享四年	仝					
弘安四年	正代、松林寺					
仝七年	毛塚、関口蔵人等					
嘉元元年	宮鼻、光林寺					
正中二年	仝					
嘉元二年	本宿、常安寺					
嘉応三年	宮鼻光林寺					
		六四一	六一五	巴七		
		六三八	六〇〇	四三五		
		六一九	五八八			
		五九七	五八一			
		六一八	四九〇			
		五九三				
貞享元年	金山様	本宿、右儀衛	田木奴安寺	松尾八伝寺造		
正徳四年	右永十六年		大工佐枝江田小兵衛	二三八		
安永九年	六面塔		田木立願寺			
	天正 年	岩殿山松寺	大工佐枝兼永	二〇五		
			松山伊右衛門			
			高坂高清寺			
			大工大工戸清水	一三四		
			清長			
				五三		

高坂村名勝記

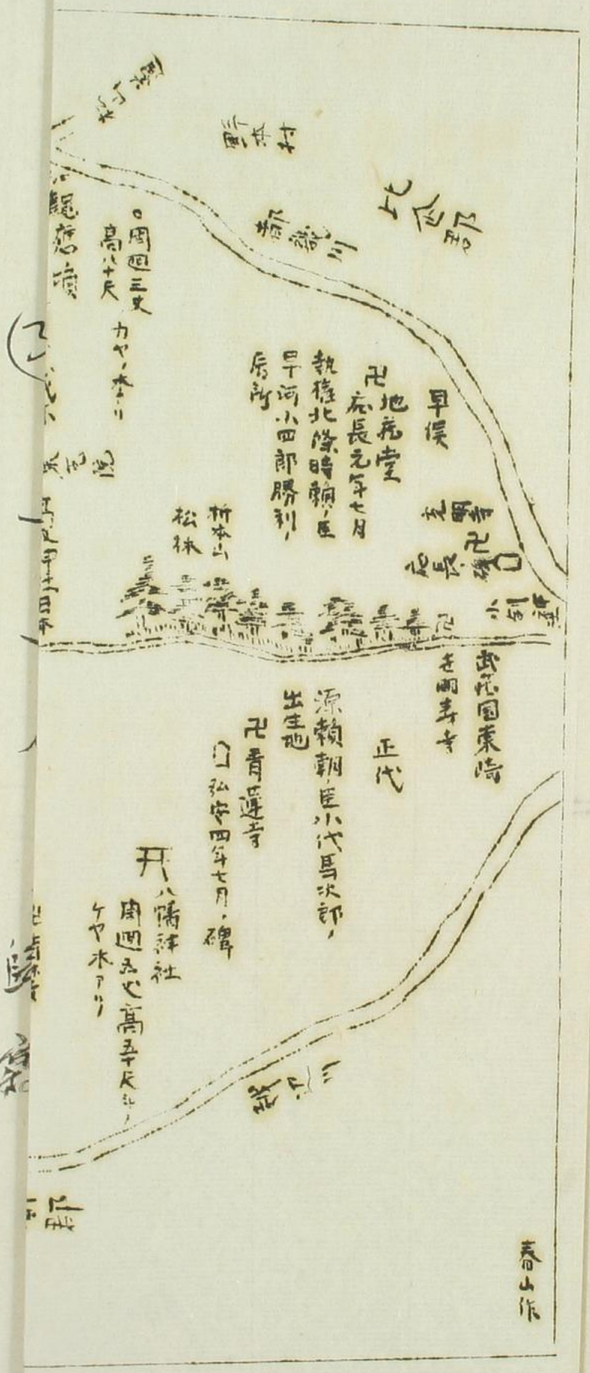
高坂村の旧蹟は
東夷征伐陣所跡
高清寺の境内よ
政尚以下の墳墓あり
鎌倉執権時頼の
奇貢录り一地花尊
正代字は其昔一
小代馬次郎の出生地
つゝく其先き東崎
並に遺れる石文は
宮鼻字の八幡宮
毛塚の字お東は

（軍歌ぎ）

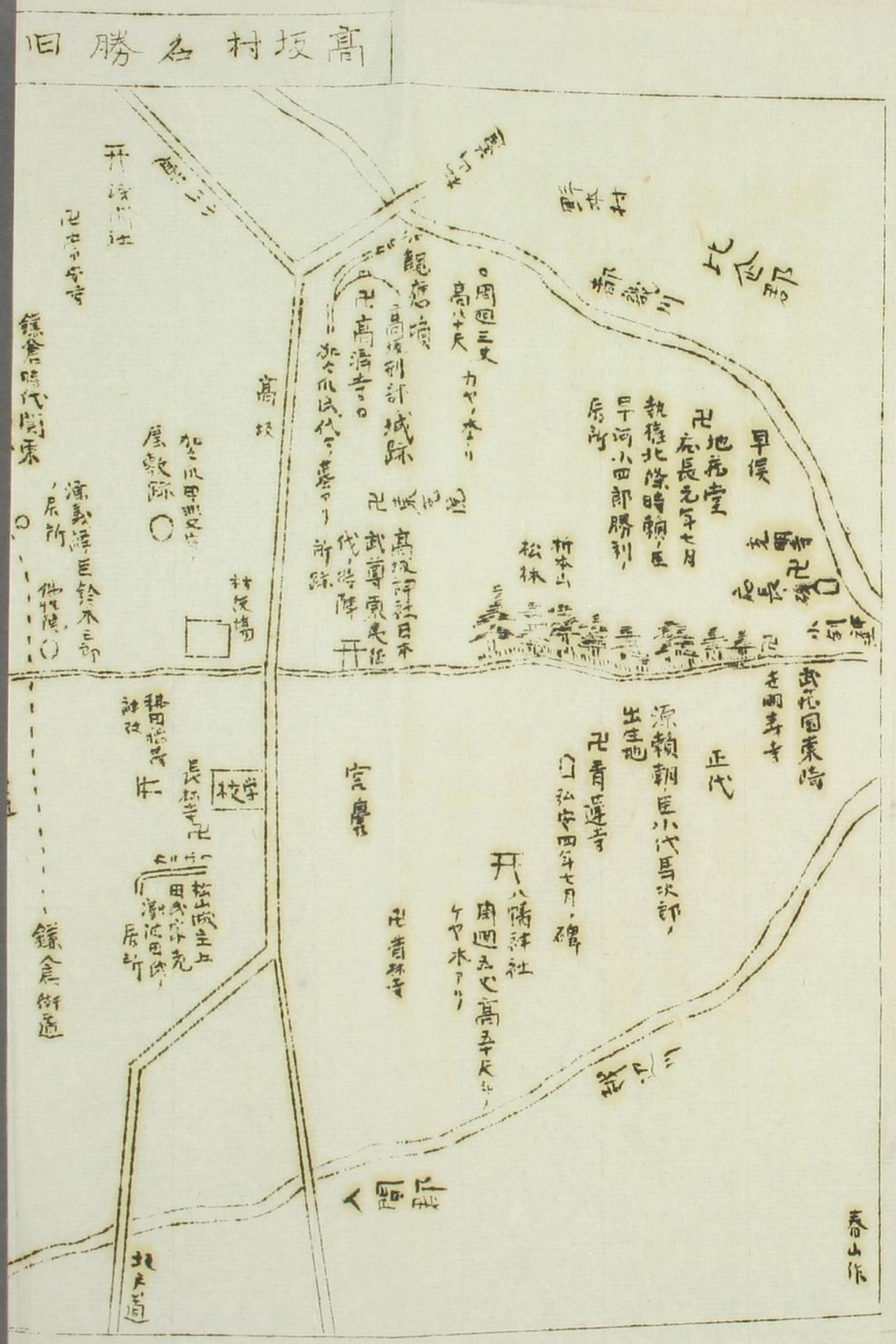
村の鎮守八日本武　春山作
高坂刑部の城跡は
並はかた小累代の
早俣字の地蔵堂
家臣早河勝利が
勝利山とぞ称へけり
頼朝公ノ箭下ろして
折本山の松林
天台宗の青蓮寺
弘安四年の古碑あるぞ
地頭横田の勧請よ
松山城主上田氏の

家光灘沢田の屋敷跡
寺と安置の祖師の像
岩殿山観世音
はじめて開く時は
たぐつかふじ古刹あり
春は躑躅に秋の月
判官塚も秋の附近
足利基氏置趾あり
義経主従奥州へ
鎌倉街道の名と高一
慈覚大師の作で
村の光りもいやまさり

日蓮宗の妙安寺
上田周防の寄附とあり
養老年間逸海の
坂東十番札所にて
物見の山の風景は
杖に曳く人は数多一
九十九谷の奥の先く
西本宮は源の
下向ふしたる道のあと
米山薬師の本尊は
瑠璃の光りと諸共に

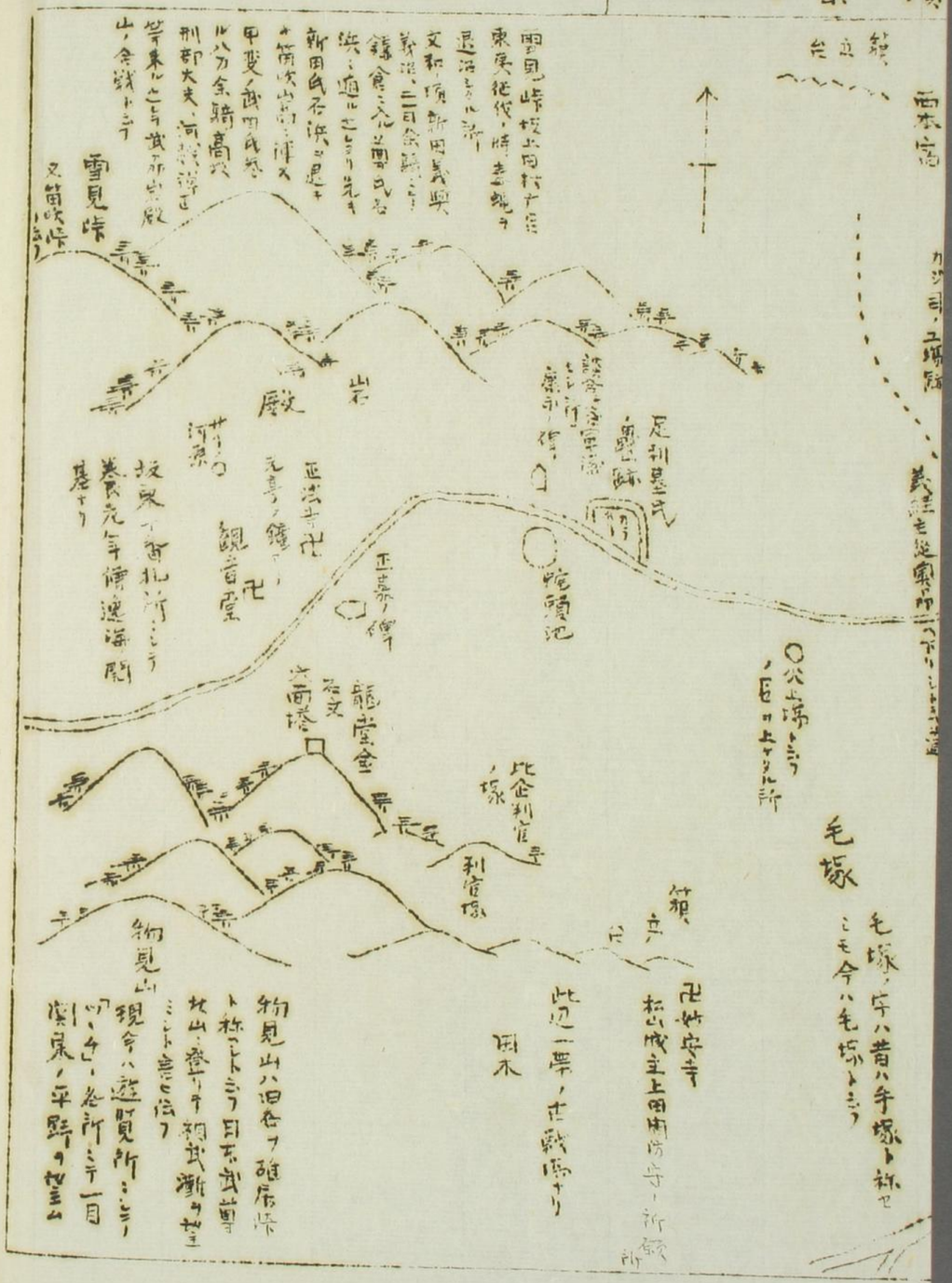


[illegible]
[illegible]
[illegible]



家苑灘辺田の屋敷跡
寺に安置の祖師の像
岩殿山観世音
はじめて開く時仏は
たぐいすくなき古刹なり
春は鶯囀り秋の月
判官塚も秋の附近
足利基氏置跡あり
義経主従奥州へ
鎌倉街道の名と高一
志覚大師の作で
村の名りもいやまさん

日蓮宗の妙安寺
上田周防の寄附とあり
養老年間遠海の
坂東十番札所にて
物見の山の風景は
杖に曳く人は数す多一
九十九谷の奥の先く
西本宮は源の
下向ましなる道のあと
米山薬師の本尊は
瑠璃の光りと諸共に



松碑如件

(墨書)

(印)

弘道之

弘道之

嘉永二年己酉三月廿日 沙弥 観海

(3次)

嘉永二年己酉三月廿日 沙弥 観海

康安二年、かな月廿日 空阿 弥陀仏

(3次)

康安二年十月十日 道

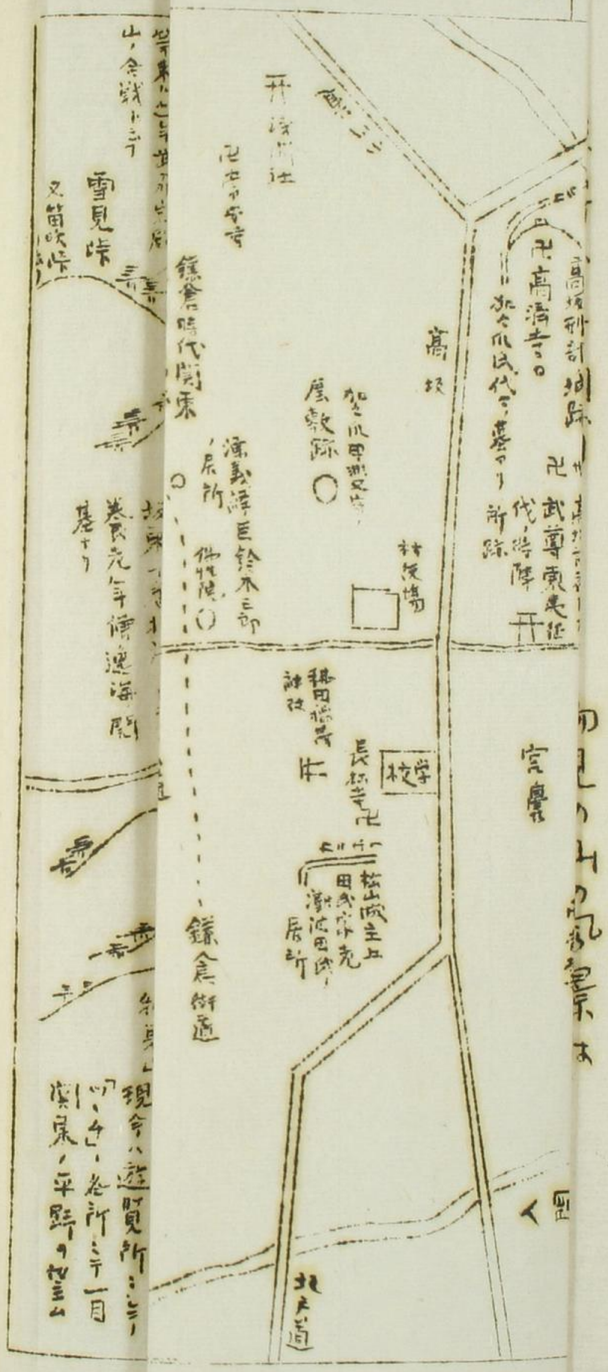
(一行不明)

松碑

(二行不明)

(一行不明)

高坂村名勝旧



家老灘汲田の屋敷跡
寺に安置の祖師の像
岩殿山観世音
はじめて開く時仏は
日蓮宗の妙安寺
上田周防の寄附とあり
養老年間逆海の
坂東十番札所にて
[illegible]

板碑拓本

(弘安)

弘安二年己卯
道七
[illegible]
[illegible]

(嘉元)

嘉元二年甲辰
三月廿[illegible]日
歸寂

(沙弥理佛)

[illegible]
[illegible]
[illegible]

百穴見学

武蔵野会研究旅行

◇……武蔵野会は既報の如く二十、廿一両日の休日を利用して埼玉県松山地方の研究旅行に出掛けた。

◇……二十日鴻巣驛から石戸の浦畷の下にある日本一の板碑と称せらるゝ貞永其他の古碑を探究する筈であつたが出水の爲めに荒川が渡れないから百穴に直行することになつて一行二十五名は三臺の自動車に運ばれた。

◇……松山街道の久米田で降り民家で便所や直刀の發掘物を見てから在郷軍人分會長の宮崎少尉の東道で息障院から字御所の吉見神社に詣でた。頗る荒廃した小さな社で傍の雜木林の丘は擾れもない甕形古墳で將軍塚と呼んで居る。中央を剥取つて稲荷(?)の祠があるが其の左右の崖に使つた石は石棺の石を利用したものだ。神社の前邊は吉見次郎の館趾だとの傳說がある、成程畠地が少し小高くはなつて居る、御所と云ふのも此の傳說から來て居るものか。

◇……石灰山の順禮坂といふ坂を上ると荒川一帶の平野が一望に眺められる景勝の地點に出た。

ひに坂東十一番の岩殿觀音に抵り寺寶を看た。

◇……百穴に行く途中に十三塚と云ふのがあることを後で聽いた、百穴に着くとパラ〳〵雨に降られたが岩の露出した山腹に蜂窩の如くに洞穴の列んで居るのは他に一寸見られない奇觀だ、穴は大抵五六尺の高さで光苔のある穴には金網が張つてあるが文字のあるのは百六號だと云ふので急斜面を傳うて登つたが中は惡戲書きで文字所か何も判らない、是では肝腎の研究も何も出來つこのないのは殘念ながら何とか保存の方法を講ぜられたいものだ。

◇……百穴と云ふけれど今は二百三十七からある、穴は穴居說を初め墳墓說抔は倉庫說と云ふ樣に種々な說がある兎に角自動車の便があるから一日の見物には丁度好い。

◇……戰國時代に北武藏の中心となつた松山城は百穴の續きの丘で市野川に臨んだ要害の地を占め本丸や二ノ丸の跡が殘つて居る、其崖に巖窟ホテルと云つて高橋某が孜々として穴を掘るのが名物になつて居る宿屋の途中で十三佛のある板碑を發見した(櫟風生)

高坂の古蹟

武蔵野会研究旅行

◇……松山は熊谷、鴻巣、小川、坂戸、川越等に自動車便がある四通八達の町である旅舍の數では食後に談話が能く纏まつて山中共古翁が考古學上松山地方を有名ならしめた故槻ノ武香翁の遺憾談や宮崎少尉の山城治革及中島の古代文字に關する話に旅の疲も忘れた。

◇……翌廿一日は天氣も好く松山小學校長と高坂村の春山回春氏の案内に高坂道を途に松山城を眺めつゝ清正公の祠がある繩塚に上田安獨齋が鬼門除に建てたと云ふ高さ九尺幅三尺位の碑を看た、元龜二年の古碑だと云はれて居るけれど吾々一行に依つて此の碑は明曆三年のものだと云ふ事が確められた『南無阿彌陀佛』の髭題目のみである。

◇……野本の無量壽寺の境内で山中翁は齋藤の板碑を發見して存を注意した、寺に今は いが建長六年の古鐘の拓本である『奉鑄鐘一口二尺七寸野本寺』とある、傍の杉林の小山は立派な前方後圓の古墳で利仁將軍が此地に東夷征伐の際に來られたと云ふ傳說から將軍塚と呼ばれてる。

◇……都幾川を渡ると高坂刑部が城趾だと云ふ所に高藏寺がある高さ八十尺周圍三丈もある樫の大木は稀らしい圖形の古墳があつて墳輪人形が出たことがある、高坂村役場に著くと一行の爲めに春山氏が持參した石器土器及び板碑の拓本や古文書類迄も陳列されてたのは大に嬉しかつた。

◇……常安寺でも板碑を採り義經主從が奥州に下つた道だとの傳說がある鎌倉街道から岩殿道に出で足利基氏の墨批だと云ふ般若の跡に息ひ田村將軍が退治した龍の頭を埋めたと云ふ不鳴の池の前には千日堂の扉に康永の大きな板碑が昔ながらに建つてある。

◇……岩殿觀音は山の中腹を開いて造られたもので正法寺で住職初め檀家高坂村長初め有志の歡待を受けた、殊に什寶明板一切經を初め高坂村にだけある古鐘板碑等金石文の拓本數十枚を陳列されてたのは一行の大喜びであつた、板碑で古いのは正嘉元年、文永十年、弘安四年、嘉元元年、德治二年、應長元年等六百年以上のものがある白山大權現と云ふ無年號の阿彌陀佛を描いた板碑は古さうだが一行は今度松山で三十日に發見した十三佛の板碑には「卯月」とか「大姉」と云ふ文字があり又應安元年の板碑には「卯刻」とある樣な緩つた研究問題を得て板碑の修業を大分した

◇……翌卅一日は天氣も好く岩殿山の古鐘は戰國時代に軍器を持逃んだので撞たらけである此の鐘にも「元亨二年卯月九日」とあるが鐘樓の横から山に登ること數丁原で六面塔の笠石がある、物見山に登つて田村將軍惡龍退治の傳說を聞き僅かの樹陰に涼を入れて四邊の色を眺める秋の晴れた日には東京灣をも望み關八州の展望しる景勝の地である

◇……龍堂と云ふ所に六面塔の供養塔を見て下山の途に就いた、岩山から高坂村の臺地は到る處古墳や石器時代の遺跡に富むから一日の清遊に適する、坂戸で有名な高尾の鮓を見て東上線で歸つた、一行は山百合の花を翳して池袋で別れを告げた(櫟風生)

大正十年七月廿五日の國民新聞

吉見の百穴

武藏野會研究旅行

◇……武藏野會は既報の如く三十、卅一兩日の休日を利用して埼玉縣松山地方の研究旅行に出掛けた。

◇……三十日鴻巢驛から石戸の蒲櫻の下にある日本一の板碑と稱せらるゝ貞永其他の古碑を探究する筈であつたが出水の爲めに荒川が渡れないから百穴に直行することになつて一行二十五名は三臺の自動車に運ばれた。

◇……松山街道の久米田で降り民家で祝部や直刀の發掘物を見てから在鄕軍人分會長の宮崎少尉の東道で息障院から字御所の吉見神社に詣でた。頗る荒廢した小さな社で傍の雜木林の丘は擬れもない瓢形古墳で將軍塚と呼んで居る。中央を剝取つて稻荷(?)の祠がある。其の左右の崖に使つた石は石槨の石を利用したものだ。神社の前邊は吉見次郎の館趾だとの傳說がある、成程畠地が少し小高くはなつて居る、御所と云ふのも此の傳說から來て居るものか。

◇……石灰山の順禮坂といふ急坂を上ると荒川一帶の平野が一望に眺められる景勝の地點に出た。丘傳ひに坂東十一番の岩殿觀音に抵り寺寶を看た。

◇……百穴に行く途中に十三塚と云ふのがあることを後で聽いた、百穴に著くとバラ〳〵雨に降られたが岩の露出した山腹に蜂窩の如くに洞穴の列んで居るのは他に一寸見られない奇觀だ、穴は大抵五六尺の高さで光苔のある穴には金網が張つてあるが文字のあるのは百六號だと云ふので急斜面を傳うて登つたが中は惡戲書きで文字所か何も判らない、是では肝腎の研究も何も出來つこのないのは殘念何とか保存の方法を講ぜられたいものだ。

◇……百穴と云ふけれど今は二百三十七からある、穴は穴居說を初め墳墓說抔は倉庫說と云ふ說があるから一日の見物には丁度好い。

◇……戰國時代に北武藏の中心ともなつた松山城は百穴の續きの丘で市野川に臨んだ要害の地を占め本丸や二ノ丸の跡が殘つて居る、其崖に巖窟ホテルと云つて高橋某が孜々として穴を掘るのが名物になつて居る宿屋の途中で十三佛のある板碑を發見した(櫓風生)

高坂の古蹟

武藏野會研究旅行

◇……松山は熊谷、鴻巢、小川、坂戶、川越等に自動車便がある四通八達の町である旅舍の帳場では食後に談話が催されて山中共古翁が考古學上松山地方を有名ならしめた故根岸武香翁の追懷談やら宮崎少尉の山城沿革及中島筑水氏が百穴の古代文字に關する說等趣味ある講演に旅の疲も忘れた

◇……翌卅一日は天氣も好くなり石井松山小學校長と高坂村の春山回春子を案內に高坂道を遙に松山城を眺めつゝ清正公の祠がある經塚に上田安獨齋が鬼門除に建てたと云ふ高さ九尺幅三尺位の碑を看た、元龜二年の古碑だと云はれて居るけれど吾々一行に依つて此の板碑は明曆三年のものだと云ふ事が確められた『南無阿彌陀佛』の髮題目で書かれたのは古いものではないのでも判る

◇……野本の無量壽寺の境內で山中翁は嘉曆の板碑を發見して住職に保存を注意した、寺に今は燒けてないが建長六年の古鐘の栢木が殘つてある『奉鑄鐘一口二尺七寸野本寺』とある傍の杉林の小山は立派な前方後圓の古墳で利仁將軍が此地に東夷征伐の際に來られたと云ふ傳說から將軍塚と呼ぶと高坂驛に出た。

◇……都幾川を渡ると高坂驛に出たと云ふ所に高濟寺がある鎌倉街道から岩殿道に基氏の陣址だと云ふ殼田村將軍が退治した館趾だと云ふ殼田村將軍が退治したと云ふ不鳴の池の前堂の崖に康永の大きな梵鐘がある。

◇……岩殿觀音は山の中腹にられたもので正法寺で住村高坂村長初め有志の發行の大喜びであつた、殊に什寶明板一切經は正嘉元年、文永十年、嘉元元年、德治二年、應長元年以上のものがあるたと云ふ無年號の阿彌陀板碑は古さうたが一行

坂東十一番の岩殿觀音に抵り

を看た。

百穴に行く途中に十三塚と云

があることを後で聽いた、百

著くとバラ〳〵雨に降られた

露出した山腹に蜂窩の如

洞穴の列んで居るのは他に一

られない奇觀だ、穴は大抵五

高さで光苔のある穴には金

張つてあるが文字のあるのは

たと云ふので急斜面を傳う

たが中は惡戲書きで文字所

判らない、是では肝腎の研

も出來つこのないのは殘念

保存の方法を講ぜられたい

穴と云ふけれど今は二百三

らある、穴は穴居說を初め

扱は倉庫說と云ふ樣に種々

ある兎に角自動車の便があ

一日の見物には丁度好い。

國時代に北武藏の中心とも

松山城は百穴の續きの丘で

に臨んだ要害の地を占め本

ノ丸の跡が殘つて居る、其

窟ホテルと云つて高橋某が

して穴を掘るのが名物にな

る宿屋の途中で十三佛のあ

を發見した(櫓風生)

高坂の古蹟

武藏野會研究旅行

◆松山は熊谷、鴻巢

小川、坂戸、川越等に

自動車便がある四通

八達の町である旅舍

の耕屋では食後に談

話會が催されて山中

共古翁が考古學上松

山地方を有名ならし

めた故根岸武香翁の

追懷談や宮崎少尉の

築水氏が百穴の古代文字に關する學

說等趣味ある講演に旅の疲も忘れた

◆翌卅一日は天氣も好くなり石井

松山小學校長を高坂村の春山回春

子を案內に高坂道を遙に松山城を

眺めつゝ清正公の祠がある經塚に

上田安獨齋が鬼門除に建てたと云

ふ高さ九尺幅三尺位の碑を看た、

元龜二年の古碑だと云はれて居る

けれど吾々一行に依つて此の板碑

は明曆三年のものだと云ふ事が確

められた『南無阿彌陀佛』の髮題目

で書かれたのは古いものではない

のでも判る

◆野本の無量壽寺の境內で山中翁

は嘉曆の板碑を發見して住職に保

存を注意した、寺に今は燒けてな

いが建長六年の古鐘の拓本が殘つ

てある『奉鑄鐘一口二尺七寸野本

寺』とある傍の杉林の小山は立

派な前方後圓の古墳で利仁將軍が

此地に東夷征伐の際に來られたと

云ふ傳說から將軍塚と呼ばれてる

◆都幾川を渡ると高坂刑部が城趾

だと云ふ所に高濟寺がある高さ八

十尺周圍三丈もある樫の大木は稀

らしい瓢形の古墳

形が出たことがあ

に著くと一行の爲

參した石器土器及

ら古文書類迄も陳

大に嬉しかつた。

◆常安寺でも板碑

が奧州に下つた道

る鎌倉街道から岩

基氏の墨址だと云

ひ田村將軍が退治

めたと云ふ不鳴の

堂の崖に康永の大

がらに建つてある。

◆岩殿觀音は山の

られたもので正法

村高坂村長初め有

た、殊に什寶明板

坂村に於ける古鐘

拓本數十枚を陳列

行の大喜びであつ

のは正嘉元年、文永十年、弘安四年

嘉元元年、德治二年、應長元年等六

百年以上のものがある白山大權現

だと云ふ無年號の阿彌陀佛を描い

た板碑は古さうだが一行は今度松

山で三十日に發見した十三佛の板

碑には「卯月」とか「大姉」と云ふ文

字があり又應安元年の板碑には

「卯刻」とある樣な變つた研究問題

を得て板碑の修業を大分した

◆岩殿山の古鐘は戰國時代に軍器

を持運んだので瑕たらけである此

の銘にも『元亨二年卯月九日』とあ

る鐘樓の橫から山に登ること賽の河

原で六面塔の笠石がある、物見山

に登つて田村將軍惡龍退治の傳說

を聞き僅かの樹陰に涼を入れて四

邊の景色を眺める秋の晴れた日に

は東京灣をも望み關八州の展望し

得る景勝の地である

◆龍堂と云ふ所に六面塔の供養塔

を見て下山の途に就いた、岩殿山

から高坂村の臺地は到る處古墳や

石器時代の遺跡に富むから一日の

清遊に適する、坂戶で有名な高尾

の墓を見て東上線で歸つた、一行

は山百合の花を折して池袋で別れ

を告げた(擔風生)

大正十年七月廿一日の國民新聞

武藏野會研究旅行の特高傳幹事記

比企郡吉見
吉見山安宮司
四王社へ納の
猿の繪馬
へ、出し猿のある
おもて

伊賀考と四谷天王

伊賀考と四谷天王（これ武家作法四谷通ふる迄ご大正十年八月考）

四谷の地名は野原の地にて新宿の先に中野と称する地あり此中野より東の方なまり痩ると申す説あり家康公関東へ御入国せられ江戸城御普請の節伊賀の者を召連れ四谷の辺に住居せしめ其者共を以て門番を勤めさせられ候故伊賀町と唱へ候由其後伊賀の者共大久保加賀守殿へ御預けに相成候節大久保加賀守殿の屋敷内へ引移り候故伊賀町も四谷へ移り候と申伝へ候由

大久保加賀守殿の屋敷内へ引移り候故伊賀町も四谷へ移り候と申伝へ候由

和せ□□□□□□□□□□野久の名を□□□□□□□□□□

[illegible]の国をおさめ給う後ち霊亀二年内堀二事の時
服部及伊賀の[illegible]新に開いし四谷の[illegible]移れり[illegible]伊賀町
のおこりなり服部の氏神及仲[illegible]
半蔵は家康の三男(故有り生育)の菩提を葬うため法性
となり四谷寺の[illegible]井[illegible]
寺の檀徒となれり[illegible]今の仲[illegible]
称せり[illegible]今の仲の[illegible]
当時伊賀より二百人[illegible]
家康公伊賀より来の[illegible]
[illegible]と言ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]
百二十八人に減少しあり

[illegible]
古き書は[illegible]
一年に見えたる一節あり
四谷天王二[illegible]
又山[illegible]のぼれは天王の社あり
かなる宮ぞいて縁起もなく
産神なり
[illegible]
[illegible]
[illegible]

其一四谷の牛神田明神にあり天王を遷し牛頭天王と共に祭る四谷牧夫行に傳ふ
其二四谷忌所に牛頭天王の社あり牛頭天王と牧夫とを祭る
所の立てもの牛頭天王と牧夫とを祭る
せに牛は想の生
王ふめる牛頭天王社を勧請せり
廿三日毎月古老の
と祓し其論にお祓しめる
揃い給うの父にてあり其社
詣のの祝三の四谷
詣めるる天王社を持参りと元来
たるものゆえ牧夫は
と思ふ

四谷天王と神田明神との関係
新宿追分の祭典の時は神田明神社より神職参りて寛政の末頃
より牛頭天王社を勧請せり
神輿無く寛政元年より別当
が神輿一基文政二年二基の後ち
明治四年別当神社の神職
のみを剥れ四谷天王とのみ称
四谷に天王社を勧請せり理由
門のごとく四谷
めも細歌共に此
度天王社が創立二百五十年
四谷塩の時に
天王を勧請せりことなり

印記

大正十五年八月二十日午前九時高麗村の高麗の古跡を見んとて
午前七時半より此度の飯能行の事なり昨夜来雨降り
当て宅をも出で難く雨具の仕度をなし
ぶるまゝの出発なりしが幸ひ雨も降らずして
なりやうやう飯能に到着して一同茶屋にて
は僅に二人なりし故一台にて井上新井氏
見て参るとの事なり故一台にて井上新井氏
飯能にて小車二台を雇ひ一台に三人ずつ
過ぎしころより小雨降り出したれども
わりの光景はなかなかに面白く高麗川
光景はよくとれども雨のために
高麗神社の境内にて

これより出す黄紙朱書の疫神祭とでもいふ
御守札は慶元和の頃に疫病流行せし
あるゝ素盞嗚尊の夜刀神を神社
の元仰かゝる神社
と唱へ到着せしに
してのことゝ
高麗神社
と思ふ
祝ふと重畳とせしものゝ如し
しかり

文應二年 高麗山聖天院勝樂寺 大日如來坐像 并定盛朝臣 大工物部恭吉 造

高麗山聖天院寺記

一所在地　埼玉縣武藏國入間郡高麗村大字新堀小字寺山（地名同字）

一名稱　大平山京都智積院末真言宗新義派中本寺高麗山聖天院勝樂寺古傳曰天武天皇御宇高麗國王若光（又曰考證）避國難來歸圖家朝廷優遇授位階大寶三年特賜王姓元正天皇靈龜二年於武藏國置高麗郡令永住焉爾時隨從者一千七百九十人分散居郡中高麗王相見地也居於大宮之地親族富臣概住其附近因之稱此地曰高麗鄉今之入間郡高麗村之高麗川村一円之總稱也

王逝去之後其侍念僧勝樂欲建立伽藍祈王冥福未果而天平勝寶三年於此其弟子聖雲（高麗王第三子）繼遺志納師之遺骨草創一宇曰勝樂寺云後六百年爲應理冏闍梨（法相宗）之梵筵中古至貞和年間有中興秀海上人深歎敎法中微就山城醍醐山無量壽院僧正公紹（真言密敎眞言祕法從是改爲真言宗（眞言宗）之道場從此法燈日盛月榮武門歸依弥不淺天正十九年德川家康公移江戶城也追先規賜寺領十五石及德川氏治天下寺運益加隆昌門末五十寺焉

十八檀林之一院主格式準小諸侯可謂盛矣然明治新政之後教法衰頽當寺亦
時弊寺運益衰終至荒廃之極伽藍不堪風雨於此本宗管長松平實誾憂之
知之頽廃法燈或滅起権中僧正伊佐辨盈師令當此救護蓋師嘗由復山城宝
寺僧正令來東上入当寺實明治三十年也再興当寺萬難蝟集之裡雪恥
積極拡張健闘艱難備嘗其心肱支大慶之傾頽于一柱致有今日右實僧正
之力也僧正之在当寺也或見擬管長或被聘于大学林皆辞不就度外名利專任
一山興復意又可欽哉子爵嶺亘慶閣下亡命中嘗遊当寺共僧正法話清談
有所默契子爵之遺赦殷韓國也僧正切請其隨而共渡航布教于先王故國
四老衲頽齢假令化韓山之土非所惜頼以身捧教法子爵與閣情未定論止之
未幾四年三月示寂矣其弟子伊佐辨長以遺命受法脈正二位子爵梅園
紀次子也明治三七年醍醐智積院聘議政属当寺于智積院当院法脈中興
以前不詳秀海以後至現代四十八世五百六十年距開基一千六十餘年也院初在
下之平地中古移之現今之地云山下水田中今猶有古寺柱根之存者

建物及碑碣

本堂　間口十三間　奥行九間　萱葺平家木造
　寛永年間回禄之後再建
山門　楼閣　間口四間四尺八寸　奥行三間　瓦葺木造
　天保初年建立之模造江戸浅草寺仁王門云
阿弥陀堂　五間四尺四方　萱葺平家木造
　寛永年間金子六右エ門者為父世菩提就立之
巨鐘　高三尺三寸　直経二尺五寸
　元禄年間鋳造
古鐘　高二尺七寸　文應二年三月（音五十餘年前）物部秀重鋳造之秀重者当代
　（居士也）

本尊佛
聖天尊　聖天尊自作佛　一寸二分　一身銀体一千共高弗玉若光自高弗國奇来

不動明王
天正八年鎌倉佛工大藏法眼作其在胎内不動尊者弘法大師作
等寶
大般若經六百卷
一切經二千八百五十卷
高麗王墓上有多重塔成于六層之方石豊高七尺五寸下部一石四面刻佛像

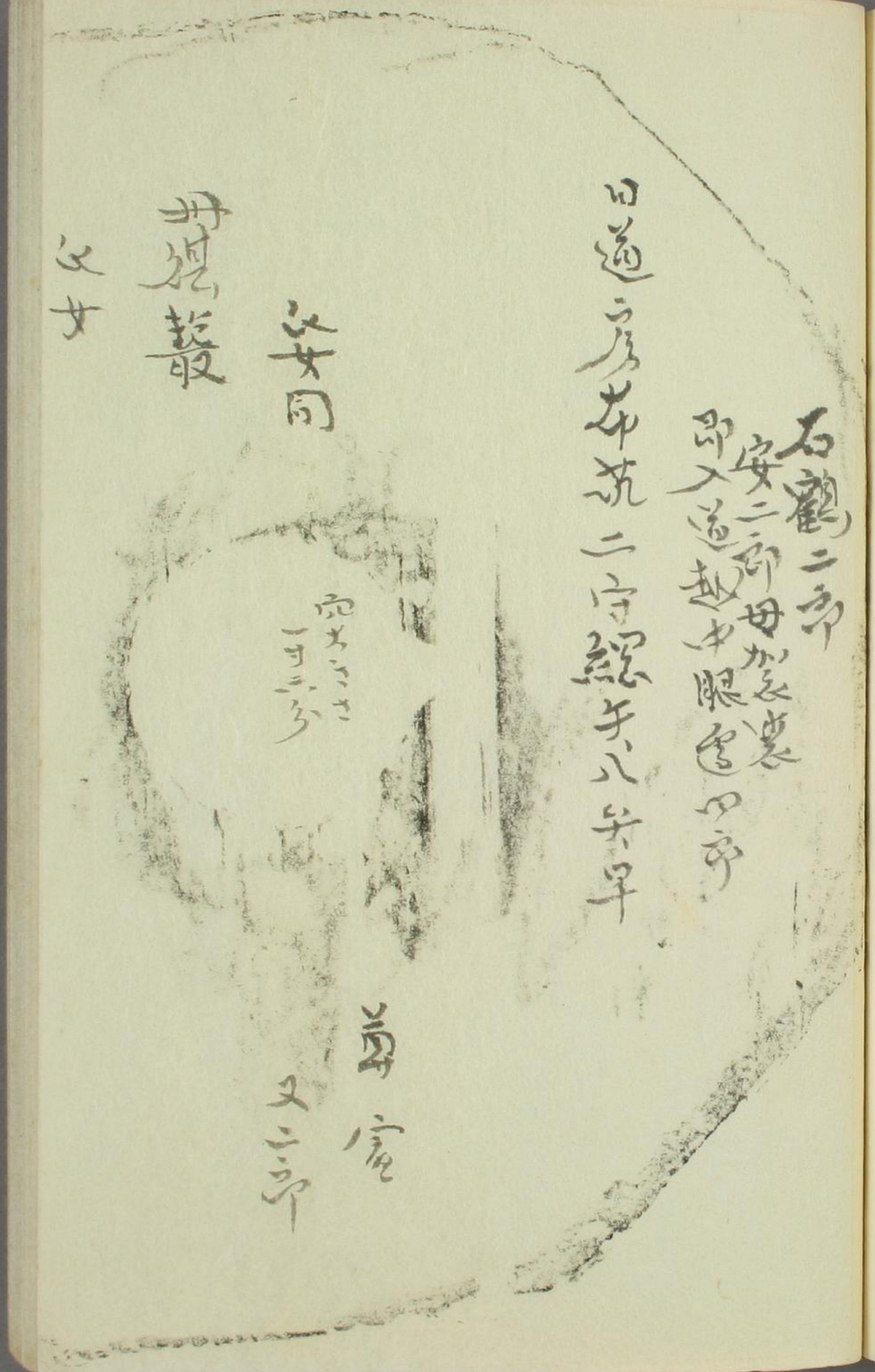
石草之帳
庚申之巻
四紀行

十五年八月廿六日武州板橋宿を出立
庚申のとしの道中記
に乗物にて東海道
次第しるすにおよばず
品川宿にて車
品川宿にて車
ここにて北へ
ここにて北へ
ここにて北へ

新京萬壽寺
所收古木考

新京萬壽寺所收古木考

八角形 經幢 高サ十尺四寸



大正十年四月廿四日武
おまえ二見おまえ筆墨
ちなんで撮影す

の「こんてもつすゝもんぢ」の
此事の書もて
元禄七年のいろは
すゝめ
おもそもそも
宗教
てあらんと思ひ

創世記の二章にアダムが諸動物に名を
かりによりて名づしやはもらねど我等の祖先が名づけ
其鳴聲
其動作

其形に依りしもの三つは重もの
多くは此例もらん
せるもの
其動作によりてその
鼠はよく見るの意
蛍牛
マイマイツブロとは
觸角を幼童の
角を太鼓のバチ
其形によりしもの

其形に依りしもの三つは重もの
多くは此例もらん
せるもの
其動作によりてその
鼠はよく見るの意
蛍牛
マイマイツブロとは
觸角を幼童の
角を太鼓のバチ
其形によりしもの

其鳴聲によりてその
蚊
目見ずの意
蜻蛉

赤坂の御所の管弦の事

学校焼の跡の事

出立の心構へ……（略）……

近く学校焼の跡の陶器市中の処々に見物す

が家苦しき中の賑ひの多し水入りの青色の釉ある土器の姓家その火鉢の様なるもの数多くあり

赤坂の里の御所の管弦の催しは唯一前あるのみ外に無し

近き人々の言ふ様にあらねど始めにも述べし如く今の処にては

さそ多くの人々も集まるべきなれど

東にあり同郷の人にあひさまざまの話しをなす

汽車は三度目の事

大正二年九月一日記す

郵便局さん……ナゼそんなに急にしやがんでさうの、ハイタメソだやや学校で何にもわすれたのヨーカヨーカ

ちとふさん先生が歌をかいて下さつ

千日詣の事

信濃にある一九の住家及其前の様子あり

寺

信濃の善光寺の事

守直院の事

千日詣とは善光寺の事なり千日参ればよき事ありとて千日詣とはいふなり

千日詣せりと云ふ人千日詣とは

千日詣せりと云ふ人千日詣とは

せり永田山一行院千日寺とも云ふ

信濃の善光寺の前石の階あり又

繁き人と書せりもあり又

信濃の善光寺とは

才蔵の事

一九のゆかりありて才蔵地蔵

一九の家あり

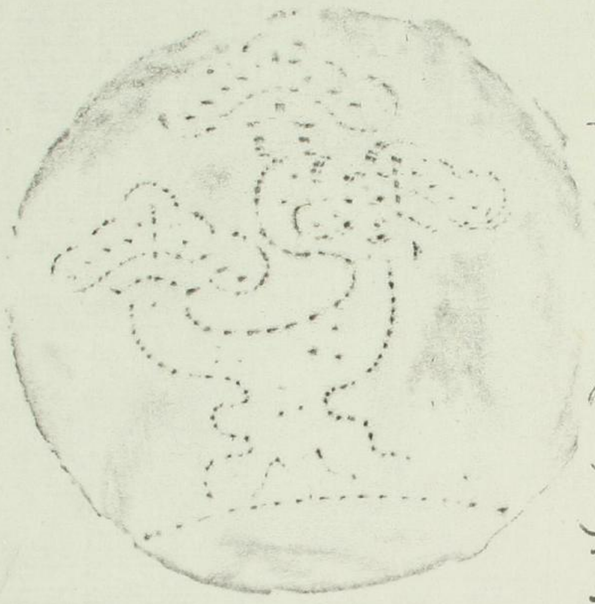
一九の墓ありと又

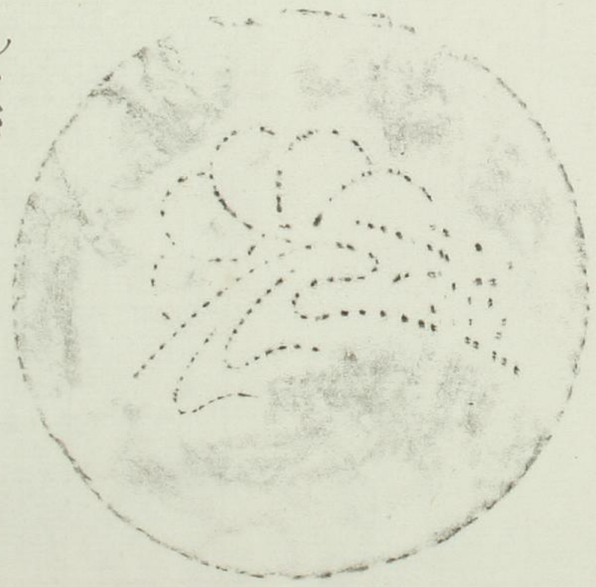
メツ野とも云ふ

其角の事

其角は

弘化八年せんぐみの掲形





せんぐみの掲形川鎖の七

東京都立中央図書館蔵

満ありて其辺に土饅の杭に白紙を杭の数を包みあり引
いて結びあり況ぐらの況もうさぎし
況ぐらの況もうさぎし
樹木のもに杭の木二本
ありこれか杭の数と包みし訳のかと思ふる
況ぐらの況もうさぎし
況ぐらの況もうさぎし
況ぐらの況もうさぎし
況ぐらの況もうさぎし

越後東蒲原郡の姥ヶ懐と姥牛の童謡

越後のうば石

武蔵野に関する二三の話

姥牛の童謡

（一）

デンく虫角だせ鋏もせん前もするからもだす

越後のうば石

越後東蒲原郡東海道の
ある細長き石を本体
に擬したるものにて
すべて四つそろいは
れあるからそんがうば石の四討
武蔵野に関して
多き話ここそ、武
北西に限りて出

[illegible]

[illegible]

[illegible]

牡鹿もて為はするは
武義をまつ事と云てそのかみの
こもるものと云へどもかゝるものゝきりくを

武義名義に就て

物名大人いふ自牧立に對ひして狭下もりて
古事記傳年邪支國をまつ義字まつ義字まつ
と書ける邪字なれば國名も同じ
發すことをいまだ
後訓栞むさゝとよむいふの轉せるもと古事記に
は胸刺と見えて歌に佐泥佐斯佐賀年とあるも佐

發語泥いふもの略さもゝれさゝて武義相撲も並べ
學げなるも
類聚名物考
後にうめし文字なり古事記ゝいふ年邪斯と書けり武義
賀茂翁もむさゝ廣國の古語なるべし延喜式其
の外ともむさとも
みなり
又武義ともむさの下とも
山ツサシのうサシハ尚武のの義
中略の歌の歌十二もさ

西故儀等、武義訓ゝ山
也此國語ゝの海ゝなるべし
いてもそ

武義國名の安に就て

十二もさゝに就て

洪洲も心ゝ略こゝ
ゝゝ八道行成和名

鈔雑載の巻之八道行成讀ニ庶須賀利とあり今ル国舎
まてハスカリとそ〳〵ヤサをエラまて十二むさ
とそ〳〵十二ハ早馬の数十二あり駒馬を添てそ〳〵
ムサシハ馬揃なりマとムとそ〳〵に同じ将棊のコマも馬とそ
はちそ〳〵詞あり又ヤサスがりと云ハヤスがりなるべしヤスは安
この約語にて八道スガリと盤まて通ひて十二の馬を指すと
記馬にスがり廻るなりて廻るを画くなりスがりは子馬
物数称呼十二むさ〳〵とそに中むにて
もさ〳〵とそ四手四手にて十二さすべしとそいひ碁盤にて
諺意もさ〳〵とそひ信濃にてさすがとそ
以ニ五を二に割しそ考のもそ〳〵そ〳〵す

蟆の童謡に就て唐土の説

信州善光寺及奥州にて田螺の童謡あり其詞に
黒坊主と云ふ人松と云ふ人松と云ふ人松と云ふ
うたふなりなれども此童謡あれば歴史
詞のことくあるなり一説に
信州の田螺〳〵行けば去年
があちらつつつツツ迄
まいあの山
名古屋つぼとの〳〵の狸岸をせまいかもしれぬ
なれば鳥とそ思ふかけからちんとつゝき〳〵
にいとござる
雨の降る日
同じ
田螺どの
ちひちんとりさつせんか
狸国
タツぶ殿〳〵狸岸をせまいかもしれぬ
なれば鳥とそ思ふかけからちんとつゝき〳〵
雨の降る日
同じ
田螺どの
ちひちんとりさつせんか
狸国
タツぶ殿〳〵狸岸参りさつせんか狸とそ思ふ

梛の葉の家 跡

がアッチ向いてはつきり雨の降る日にざくざく梅ぼしんきがするわいなー

下總香取郡の田園で鳥がたこをもくろさけばたんとさうても見事ね音

前にこせる黒須なる人々庭の掃き掃除をしまして人々ふかまれ引りそ、好き用をやめて人々となりとねるこゝろくと鳥のごとくにこゝろ

梛の葉と家紋すゝ鈴木とう家もう其の先は紀伊熊野の神職の家まで梛は神木もれがられもとせ梛とう文鳥そつさるま火燵(かじ)の中のおとそ

武蔵野の總持寺についての觀月會

大正九年九月十七日例によつて武蔵野會觀月會こゝを總持寺に行くに市ヶ谷より電車にて飯田橋にて乗換へ電車にて後れて来らんかりそこに一行と行んかりそこに一行たりひるこゝにて弁当を開きこゝにて一休みして一行と共に歩みて總持寺の門前に着せり門前の左右に石灯籠一本宛を立てり門を入れば左右に松樹多く植ゑられ其の間を通りて行けば左に大なる池ありて其の中に石橋を架せり橋を渡りて行けば左に大なる堂宇あり堂宇の前に石碑ありて何事を記せるや不明なり堂宇の前を通

接待為鑁の敬

大正三年九月吉日

大峯山總持寺什物

[illegible]光禰代々[illegible]

帝開土

名古屋市大曽根町

辻家維本郎

鋼条製の表に桐の紋あり

大正童謡言葉。七ツの女の子に貝がらと竹のはさみとを持ち遊ぶうち赤子を泣ひつつ

爺さん婆さん赤い子連れといて

爺婆とは子の数に比す前後曲り向覚のおく歌詞ひとりごとの事

男の子下駄かくし逃びとそ

ジヤンケン ポツクリ下駄日和下駄カラ〳〵光ノが吾妻下駄

おつチヤン数の子 跳の子 (これは江戸時代よりかくれんぼ)

雨コン〳〵 ヤンデクレ アシタノバンニ フッテクレ (雨降りもせぬ内)

チヤクイよ (ずるい)

ゴン三数もうそ

大正十年九月二日皇太子殿下の御召列車 東京百五十九萬人 江東全通 行列七十哩 十萬七十圓

皇太子殿下の御召列車

馬場の成

いろ〳〵将軍馬場の成と

ある者は中日里の横兵衛

歌を集め置き

れこよりは鮑貝を伏せ

貝をあさめて歌もうす

のあ兼さの矢

いて古本の

ねこ安四

今七粒

下総法令 長柄 福徳 二年の銘 口

あづまや
あづまうげ
あづまごえ

常陸の国の一ノ瀬下總の猿島郡大根村に文明十八年
逆修の碑あり此郡の郷にある福徳二年とある異年
號いかが訝しかるに大字の中に大福徳元年とあり福徳
の板碑と同じく延徳三年とあり右の井村
のいと元年とあるは此地にて下總にまたがりて延徳二年庚戌
にては一年遅れたれど用いし年號なるべし福徳元年とせば延徳
や否やそうねど異年號なるもの
あづま 是行記ひがのわたのくにに、あづまやおおらかなるいへおもてにおもて柱こそ
の家にてありしなるべし 古代武蔵野のさま人

あづまやとそいひあづまからげしと云、「きつのそがあつ
まおらみのあさごろもつみたまくかもかせそのつまをあれ
かくそうたくとそもりと覚のつまごもるものぞ
きあづまこそ東人の
きつのこそ同じ
うたあづまこいせる細布
名井塚そもう、これは
者講もすび結願に塚
此塚法えにあり庚申
とあり庚申塔
の塚

あづまやとそいひ
あづまからげ
あづまごえ

都離子云蛟蛇游汗決瀆之澤蚓蚿以其族見
喜其類也蚊與俱入月使龜與之問曰彼何
急曰彼宅于月中身使棲特樹樹之陰蔭泰和之淳
精吸風露之華游地無砂急也蚓蚿曰若是則子不
能從矣子處決瀆之中一日而三飽子焉能從蛇蟺
棲于泥滓杙其晝勝而復命使迎而覩之則子蜿蜒而急其蚓竅冀汁
而飲之滿腹然後出勝焉龜離迦曰狐之急園蚓
吟嘯冀汁也一日不可無也而焉能從子蛟蛇蟺螾而肭
鳴呼予何罪乎而生與此物數也

不忍也の川やあらいにうつり少女の森の上にうつり列當庭をうつり
そこここそこここそこここそこここそこここそこここそこここそこここ
河のりくれがゆそのりとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
あなかわかわこの輪のわこ五月のあんぬもうそうそうそうそうそう
ひりるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
今はわそ始めとうりやしの情懐いりおもうあるもの二書絵巻物のやうに七くし乱
しが新忘よう事ずにあるもの二書絵巻物のやうに七くし乱
もあり川こをうういふこをうういふこをうういふこをうういふこをうういふ
月そうしものもそうしものもそうしものもそうしものもそうしものもそうしもの
しうの月いい對すこうをもくすとてもくすとてもくすとてもくすとてもくすとても
火事のお月様雲めがくせ
かくせ
かくせ
か

毎日見学する蚯蚓の子はそれを解す
ずまいあらず
田螺の俚謡を作りこれ福岡縣人の来言ひそうかそ
田螺私童名詩りはちょくらおかいやでれ去年の春お出で懸りほ
たに鮮私から誘はれて一よろ時参と称と鼻奴
とあちらこちらばからかしてかいこづく其癌かの出せもの土用冬来
れば…くつくつくつくつとうつ
すもう〳〵あるけれど七くづ
山の峠の古螺貝とそれを練
にあらはれる
田螺の謎そいこれが当五分も長く面白し田螺は春の
あまよもうもうのめそ春のまで
同
初代柳亭燕彦
後から嫁が嬉うたかひよ
やの宮にきめたにくい駿つき
同
古今集
春のあの、ねまくらも我もみよ嵐のすもりになせそ
古今集
古今は家恩まで我けき学雪雀なる梅雨のまから
女達磨さん般ともいそもさんかんなんたらす一物もる
武亭三馬
達磨さん般ともいそもさんかんなんたらす一物もる
鳥亭焉馬
五代目三升招物
用いる見よもちかくはうつてかぐら月それで用書えのかほ見
牛込長谷寺の碑に
十返舎一九

姫城にうそをなひくそ
龍宮でおべさ魚のてがら
あめもそれもくこれ
きそうてゆるのきそ
ろさのさそねる
ゆらくのかみいあくそ
ポプ持ぐる位ようて紙のこよりそ
バイロベノカミハタレニヤロカレニヤロ

八十八歳 京山

玉川春好

元禄四年 牧童
寛年 ○ 梅ニ手拭
の図あり

弘前の三味線

心掛にあらて
そて三味線を
さる

ネフスキーと弘前ハ行ハれ
南さ

とうたばち今あかる、ヨサレソー、ヨイヤ、ソーラ、ヨイヤ、

右チャッペ津輕方言猫

東京ゟ新刊ハ明治廿年七月十日ゟ

中迄右九回ニ而當庚申冬長谷又新元祿四年九月二十

一日ゟ翌年下迄冬ニ而新板の里通の續庚申冬墓ニて

天和二年元祿四年等の年號ゟ

國會圖書館藏書

東京中
4.6.16
8-9
5.21